I-23

建築写真家による作品表現に関する研究
大橋富夫を中心として
A study on the architectural photographer's expression
With a focus on the works of Tomio Ohashi

○渡邉祥太 [1], 山中新太郎 [2]
*Shota Watanabe[1] , Shintaro Yamanaka[2]

１章 序論

1-1. 研究目的

大橋富夫は、日本を代表する建築写真家である。建築雑誌『建築文化』[1)]を中心に活躍し、1960 年から現在に至るまで、日本および海外建築家の代表的な建築 1600 件以上を撮影している。『日本の民家 屋根の記憶』[2)]では、1960 年代における広域な民家の写真記録として高く評価され、2009 年に日本建築学会文化賞を受賞している。

建築家と深く関わりのある大橋富夫の建築写真を通して、建築写真家達が建築家の意図をどのように表現しているのかを本研究で明らかにする。

1-2. 研究方法

まずはじめに、建築写真に関してどのような社会的背景が存在しているのかを、建築写真家にまつわる記事を対象にして分析していく。次に、日本建築写真家協会の写真を対象に、建築写真家が自由に撮影した場合、どのようなものを撮影するのかを分析する。建築写真家の撮影手法の特徴を理解した上で、大橋富夫の建築写真を対象に、建築家の意図と撮影手法の関係を分析する。さらに、建築家の意図をどのように表現しているかを明らかにし、総括とする。

1-3. 既往研究との位置づけ

建築写真を対象として行われている既往研究として、堀川氏らによる『白井晟一の設計手法に関する研究-建築写真に表現された空間構成-』[3)]がある。これは、特定の建築家の設計手法を明らかにするために建築写真に着眼点を置いているが、本研究は建築写真家がいかにして建築家と関わっているか、という点に着目していく。

建築写真に関しての既往研究は少ないが、建築写真について論じている文献は数多く存在している。たとえば、建築家や雑誌編集者、建築ジャーナリスト、もちろん建築写真家も自身の撮影手法について対談形式で論じている。本研究は、それらの意見の総括となる研究とする。

２章 建築写真に関する分析

2-1. 建築写真の特性

まず、建築写真に求められている要素を自分なりに定義した。建築写真はいずれも建築の情報を伝えることが大切である。高井潔氏の『建築写真術』[4)]において、建築写真の役割は「建築の記録・保存」と「建築を美しく見せること」の２つがある。また、磯達雄氏の「現代日本建築写真の系譜」[5)]において、その２つの役割を満たすために、建築写真家と雑誌編集者が協力して写真を操作していると述べている。

建築写真家はしばしば、人やオブジェなどの目立つものを写すことは避ける。これは写真家の村井修氏が発見した「写真の一面性」の性質で説明できる。また、「あおり補正」の技法によって、建築物の垂線を整えている。雑誌編集者は、ひとつの建築に対して複数の建築写真を掲載し、写真の持つ膨大な情報で読み手を無意識に期待させるような操作を行っている。また、撮影者の主観的な思考が入らないように、撮影者や撮影日時など写真に関する詳しい情報を隠す動きがあることも、磯達雄は「現代日本建築写真の系譜」[5)]で述べている。

これらの操作で、撮影者の主張が含まれるような「作品的な写真」ではなく、意図的に建築を客観的に表現した「図面的な写真」にしていると推測する。

(Fig.1) (Fig.2)

Fig.1 「作品的な写真」*1

Fig.2 「図面的な写真」*2

2-2. 建築写真家の作家性

日本建築写真家協会の活動を通じて建築写真家の活動を見ると、クライアントである雑誌編集者や建

1:日大理工・学部・建築　2:日大理工・教員・建築

築家から解き放たれて、建築写真家が自由に対象と向き合っている事が分かる。日本建築写真家協会は 2011 年に「日本の建築・風土・環境」というテーマで写真展を企画している。それは、必ずしも建築雑誌に載っているような、建築を見せるための写真ではなかった。(Fig.3)(Fig.4)(Fig.5) 建築家ごとに大橋富夫の撮影手法を比較する。

Fig.3 小室貴義 *3　Fig.4 中村實 *4　Fig.5 佐藤周哉 *5

建築写真に人が写り込み始めたのは、1950 年代頃のことである。当時流行した芸術的表現であるリアリズムによる影響が大きいと磯達雄が分析している。対戦の影響で破壊されたまちなどをありのままに表現しようとする撮影手法は、大橋富夫や山田脩二などの多くの写真家に影響を与えた。このことは、下に載せたような写真からも感じる。(Fig.6)

*6

Fig.6 新宿駅西口広場のにぎわいが写り込んだ山田脩二の写真

2-3. 考察

建築を撮影するにあたって、建築写真家達は。建築写真の作法に写真家達の表現が収まり切らなくなったのは、建築家の青木淳が「写真に撮りにくい建築になってしまうのは、」[6]で示しているように求められる建築写真が変化したからだと考える。以前は、建築の形自体に建築家の意図があったのに対し、最近では建築の使われ方に建築家の意図があるために、建築写真では表現しきれなくなる傾向にある。大橋富夫は、モダニズム建築家の丹下健三に建築が写っていないことを酷評されている。しかし、丹下健三の弟子である黒川紀章には、建築写真に生活感があるとして評価されている。(Fig.7)

*7

*8

Fig.7 「建築+人」を写した写真

東京カテドラル聖マリア大聖堂 と 山形ハワイドリームランド

３章 大橋富夫の撮影手法に関する調査予定

3-1. 大橋富夫の撮影手法の変遷

大橋富夫の建築写真は、『東京-変わりゆく町と人の記憶』[7]で、雑誌編集者の立松久昌に「人間を重視した写真」という評価を受けている。今でもその信念を貫き通していることを 2011 年の『商店建築』[8]で大橋富夫本人が語っている。今後は、次に示す方法で大橋富夫の撮影手法を明らかにし、建築写真家と建築家との関係を考察していく予定である。

3-2. 模型写真と建築写真の比較

京都駅の国際コンペでは、日本人参加者の４人の内、黒川紀章、安藤忠雄、原広司の３人が大橋富夫に模型写真の撮影を依頼している。実物の撮影と模型の撮影の比較を行い、大橋富夫の建築に対する理解と表現を調査する。

3-3. 建築家に対応させた撮影手法の変化

大橋富夫と関係が深かったとされる建築家 8 人、黒川紀章、安藤忠雄、石山修武、伊東豊雄、坂本一成、長谷川逸子、原広司、山本理顕の建築写真を比較し、個々の建築家で異なるであろう建築写真の定義を大橋富夫の撮影手法を比較する。

3-4. 撮影者の特徴について比較

同じ建築物に対して、複数の撮影者がいる場合、写真家ごとにどのような違いがあるのかを考察し、大橋富夫の作家性を示す。

1) 『建築文化』彰国社 1946-2004
2) 大橋富夫『日本の民家 屋根の記憶』彰国社 2008
3) 堀川佳奈 岡河貢『白井晟一の設計手法に関する研究-建築写真に表現された空間構成-』日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）2012
4) 高井潔『建築写真術』学芸出版 1988 *1 *2
5) 磯達雄「現代日本建築写真の系譜」 水谷千加子『10+1 No.23』INAX 出版 2001 pp.62-82 *6 *7 *8
6) 青木淳「写真に撮りにくい建築になってしまうのは、」 大塚章子『建築の記憶 写真と建築の近現代 図録』2008 pp.258-259
7) 大橋富夫『東京-変わりゆく町と人の記憶』秋山書店 2010
8) 『商店建築』商店建築社 1956-2009
9) 日本建築写真家協会『日本 風土と建築 創立 10 周年写真集』鹿島出版会 2012 *3 *4 *5

1:Architecture course, CST, Nihon-U.　2: Associate prof, Architecture course, CST, Nihon-U.